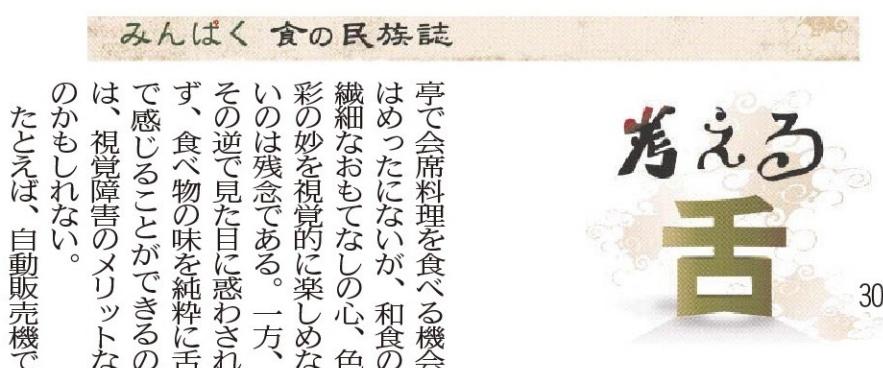


「見えなくとも食べる」  
「見えないからこそ食べる」。金看の僕はグルメというほどではないが、食べることが大好きである。目が見える・見えないに関係なく、ともに楽しめるのが「食」ではないか。中年となり体力の衰えを実感する日々だが、どうも食欲だけは20代のころとほとんど変わっていない。わがスケジュール帳の飲み会の予定を数えながら、そろそろ「量より質」を意識しなければと言い聞かせている。おいしい物を食べる際、目が見える人と見えない人では微妙な相違がある。見えないことによるマイナスの代表は、何といっても盛り付けの美を味わえない点だろう。幸か不幸か高級料



## 舌は「第三の手」なり

廣瀬 浩二郎



亭で会席料理を食べる機会はめったにないが、和食の繊細なおもてなしの心、色彩の妙を視覚的に楽しめないのは残念である。一方、その逆で見た目に惑わされが望ましい。でも、僕は時々適当にボタンを押し、出てきた飲み物を宝くじ感覚で楽しんだりする。「さあ、何が飲めるかな」「今日は何が飲めるかな」。今日は当たりか外れか。こういふたスリルは金看者ならではの貴重な体験といえよう。冷たいお茶が飲みたい時にホットコーヒーが出てくると少しがつかりするが、まあ人生は行き当たり

## 情報取り込む能動的センサー

### 記憶ともつながる味覚

ばったり、何があつても受け入れる寛大さが大切だと、自分を納得させている。視覚障害者の旅行では景色を見ることができないのと、必然的に食への思い入が強くなる。旅の記録は写真・ビデオというのが一般的だが、僕の場合は味覚と記憶のつながりが密接である。視覚・聴覚情報は、入ってきたものを受動的にとらえるという側面が大きい。受動的な記憶は曖昧なので、その記憶を簡単によみがえらせる手段として、カメラや録音機が開発された。他方、味覚は両手を動かし、自分の意思で食べ物を口へと運ぶ。そして舌は温度、固さ、形、粘り気などを感知しつつ、口から体内へと食べ物を運ぶ。ま

に舌は体外の情報を体内に取り込む能動的なセンサーなのである。舌触りという言葉が示すように、舌は文字通り食べ物に触る「第三の手」ともいえるだろう。僕の旅の思い出は「○○で食べた××の味」の記憶で満たされている。各地に足を運び、手と舌で得た情報を取り込み、舌触りを記録する媒体はないが、カメラや録音機のようなデジタル化ができないのが舌触り・手触りのよさかなとも思う。食べるのは同じでも、一味違う舌の運用法。常に能動的に自己と外界を結ぶ舌。これからも第三の手を駆使して、質にこだわる研究を続けていきたい。

(国立民族学博物館准教授)